



# EBISU<sub>san</sub>

大田区立松仙小学校  
令和3年12月2日(木)  
裏研究推進だより 第19号  
担当

## 3年生話題提供授業 協議会記録 授業者 教諭

記録：

### 成果

#### ◎児童の様子

- ・ワークシートに技のポイントがあり、児童の伝え合いのきっかけになっている様子が見られた。
- ・児童の声かけで開脚後転ができた児童がいた。
- ・場の工夫が効果的で分かりやすく、児童が自分で選んで技の練習をすることができた。

#### ◎教師の支援

- ・補助運動の「ねこちゃん体操」では、授業で使う部位をしっかりと使うことができていた。
- ・もともとある技のポイントの掲示物に手書きをしたポイントがあり、さらに分かりやすくなっていた。
- ・児童では声かけが難しいような場を見付けて回り、適切なアドバイスをすることで、困っている児童の技能を高めていた。

### 課題

#### ◎技のポイントの理解

- ・3年生として技のポイントの理解は、どこまでできるとよいのか。技が「できた」、「できない」の判断はどこまで求めるのか。児童同士の声かけで技能が高まる児童がいる一方で、明らかに「できていない」児童を「できた」評価(判断)をする児童がいる様子も見られた。児童の実態、理解度や授業の雰囲気等も考えて目標を決めて、計画的に指導していく。

#### ◎運動量

- ・本時の運動量は少なかった。本時の目標は「自分の課題を友達に伝えること」で、思考・判断・表現をねらっている。3年生は伝え合いをするのも時間がかかり、運動量が減った。

#### ◎「グッジョブ」の声かけ

- ・声かけができたときの「グッジョブ」だけでなく、失敗したときの声かけもあると、自分たちの評価に対する意識や理解度も高まるのではないかと感じた。(例：ナイスチャレンジ)

### ☆「勉強になった！」ポイント☆

〈児童の理解度と教師の見取り〉

3年生にマットの授業の技のポイントを伝えるときに、ワークシートや掲示物、動画などを使う。その段階で、児童が理解したつもりになっていないか。教師もそう思っていないか。実際に児童が運動するときは、自分の様子が分からない。それをつなげるのが、自分を見てくれる「他人」(友達や教師)である。頭にある技の手本の映像や授業で初めてできた技は、一週間経つとどうなるのか。3年生だとほとんど忘れてしまう児童は少なくないと感じた。そのような背景や事前の見取りを含め、今回の授業の先生の計画的で意図的な立ち回りやアドバイスが勉強になった。

## ☆学年の実態を踏まえ目標や課題の設定と評価を！

- 1 目標の設定：自分ができるようになりたい技を見付ける。(開脚前転ができるようになる)
  - 2 課題の選択：その技ができるようになるために解決する課題を選ぶ。(足はマットに着く直前に開く)
  - 3 活動の決定：その課題を解決するための活動の仕方を決める。(大きなゆりかごから開脚立ちになる)
- ※ 中学年では1・2、高学年では1・2・3をめあてにする。
- ※ 3年生では、技の評価(できたの判断)は難しい面がある。個々の評価は認めてあげる。事実を伝えるのが大事。

## ☆良い体育の授業とは！

学習の勢いと雰囲気大事。勢いについては1単位時間の学習(運動)時間の確保や学習規律が整っていること、雰囲気については良好な人間関係が大事である。授業の中で、「力いっぱい運動できた」「できた」「記録がよくなった」「仲良く運動できた」「分かった」「発見できた」「工夫できた」があるとよい。本時の授業では、「学習規律」、「良好な人間関係」が見られた。

## **キラリと光る付箋** 文責：

- マットは非日常的な運動。一週間で忘れてしまう。→単元計画を立てるうえでそのことも考慮しながら計画を立てられるとよい。
- 一目でわかる図や、ふり返りの場が明確であるなど、ワークシートが効果的だった。
- グッジョブの声掛けについて。  
思いを伝えたり、アドバイスがうまくできなかつたりする子に合っていた。  
言う方も言われる方も嬉しそうだった。
- 活動が多いからか、めあてである「伝えること」を忘れて進めているグループがあった。
- やってみたいタイムで着地が全然意識できていなかった児童が、友達の声掛けで3秒間止まれるようになった。
- 先生のアドバイスもあり、課題解決のための場が選べていた。また、「腰に力を入れるといいよ。」など、具体的な部位を示してアドバイスしている。
- 取り組む技ができていない児童が各ポイントのできている/いないを判定できるのか。

マット運動は非日常的な運動なので、前回の学びを振り返られるような単元計画が重要であり、正しい動きの例示が欠かせない。また、どうしても試技している本人は自分の動きを確認できないので、自身の動きを客観的に知る手立て(友達と見合う、ICTを活用する等)が重要となってくる。友達と見合う場合、見る方の力も非常に重要となる。この力は6年間を見通して育てていく必要があり、それぞれの学年でどこまでできるようにするかを決めておくと、その段階に応じた見合い方を教師が明確に指導することができる。今回の授業の中で、友達からの声掛けで運動に意欲的に取り組もうとする姿が見られたので、互いに良い声掛けをし合えるような手立てを考えることで、体育が好きな児童がより増えるのではないかと考えた。

(分析 )